

14 局所麻酔下センチネルリンパ節生検（局麻下 SNB）の臨床的意義について

佐藤 友威・武藤 一郎・長谷川正樹
青野 高志・岡田 貴幸・鈴木 晋
金子 和弘・木戸 知紀

県立中央病院外科

新たな臨床試験の結果が次々に報告され、乳癌の治療は日々多様化・複雑化してきている。一方、SNBは不要な腋窩リンパ節郭清を省略できる手法として標準化している。当科では昨年よりRI法又は色素との併用法によるSNBを行っている。また治療方針の決定のために、局麻下SNBも行っている。現在まで9例に対して局麻下SNBを行った。それらをまとめ検討したので報告する。また、局麻下SNBの有用性について解説するとともに、当科での乳癌治療方針について紹介する。

15 当科における乳癌センチネルリンパ節生検の成績

神林智寿子・佐藤 信昭・金子 耕司
天願 敬・丸山 聡・野村 達也
中川 悟・瀧井 康公・藪崎 裕
土屋 嘉昭・梨本 篤・田中 乙雄

県立がんセンター新潟病院外科

2001～2008年でSLNB目的にリンフォシンチグラフィを施行した乳癌症例1384例を対象とし、RI法単独での成績を検討した。平均年齢54歳、観察期間中央値43M。同定とはリンフォシンチグラムでの描出とhot nodeの全数が術中同定できた症例とした。

【結果】同定率は1240例（89.6%）であったが、前期（2001年～2004年）、後期（2005年～2008年）で検討すると85%、94%で後期で改善した。SLNBのみで終了した症例は973例（70.3%）。腋窩郭清移行例は411例（29.7%）で①リンフォシンチグラフィで描出なしが91例②術中同定不能が53例③迅速診断で転移陽性が266例、その他1例。術中迅速診断の偽陰性率は5.3%、non-SLNにのみ転移陽性は2.1%。SLNB後の同側腋窩のみの再発は5例（0.5%）、遠隔転移29例

（2.9%）。

【結語】同定率も後期では94%と良好で、他の結果も諸家の報告と同等であり、当科でのRI法によるSLNBは有用である。

16 カルボプラチン、パクリタキセルによる肺癌術後補助化学療法の経験

白戸 亨・青木 正・矢澤 正知

県立中央病院呼吸器外科

【目的】当科で施行した非小細胞肺癌に対する術後補助化学療法の安全性について検討する。

【対象と方法】2007年4月から当科でカルボプラチン、パクリタキセルによる術後補助化学療法を行った症例を対象とし、補助療法開始までの期間、副作用、完遂率をレトロスペクティブに検討した。

【結果】この期間の非小細胞癌手術例は171例で、当科で術後補助化学療法を計画した症例は22例であった。22例の病理病期はI 5例、II 7例、III A 10例であった。補助化学療法の開始時期は術後46日、副作用はgrade 4のアレルギーが1例、grade 3の白血球減少が4例、grade 3の貧血が3例などであった。治療の完遂率は87.5%であった。

【結語】CBDCA + weeklt PTXの完遂率は高く副作用も軽度で安全に施行できた。しかし治療を必要とする副作用も発現するので十分な観察が必要である。

17 間質性肺炎に続発した難治性気胸に対しV-V ECMO 使用下に手術を施行した1症例

本野 望・斎藤 正幸・島田 晃治

名村 理・大関 一

県立新発田病院胸部外科

症例は78歳、男性。関節リウマチおよび膠原病性間質性肺炎で免疫抑制剤投与中。2009年7月、左気胸を発症した。胸腔ドレナージを開始するも、肺の十分な拡張は得られず換気不全に陥り保存的治療は継続不可能となり手術を施行した。片肺換

気維持は不可能で術中にV-V ECMOを使用し、胸腔鏡下に肺嚢胞を結紮した。手術終了後、容易にECMOから離脱できた。術後、気胸の再発はなく、間質性肺炎の急性増悪もなく経過良好であった。貴重な症例を経験したので報告する。

18 CEA高値、臨床病期I期肺癌に対する対応

竹重麻里子・小池 輝明・大和 靖
吉谷 克雄・佐藤 衆一
県立がんセンター新潟病院呼吸器外科

1991年～2007年に手術を行った原発性肺癌2183例のうち、臨床病期I期2063例について調査し、CEAと予後との関係を調べた。術前CEAは平均4.5(0～506)ng/mlで軽度上昇群(5ng/ml-10ng/ml)は261例(12.7%)、高値群(CEA>10ng/ml)は125例(6.1%)であった。それぞれの生存率には有意差がみられた($p<0.01$)。また、CEA高値群については術後外来受診時にCEAを再検し、CEAが正常化した群、高値群に分けて検討を行ったところ、正常化した群で有意に生存率が高かった($p<0.01$)。臨床病期I期の症例において術前CEA高値は予後不良因子であり、特に術後CEAが正常化しない症例は予後不良であった。

19 肺葉内肺分画症の1例

佐藤征二郎・保坂 靖子・富樫 賢一
長岡赤十字病院呼吸器外科

58歳男性。血痰・微熱を主訴に当院受診。右肺化膿症の診断で入院となった。胸部CTで、右肺下葉に高濃度血腫を含む腫瘤影と下行大動脈より分岐し右肺下葉に流入する異常血管を認めた。肺葉内肺分画症を疑い、手術の方針となった。感染範囲が下葉全域に及ぶことから、下葉切除を施行し、異常血管は13mm程度の太さであり、no-knife endoscopic linear staplerを用いて閉鎖した後、末梢側をENDOPATH ATW35(Ethicon Endosurgery)を用いて切離した。病理所見では、正常気管支の分岐異常、病変部との交通は認めず

肺葉内肺分画症(Pryce II型)であった。No-knife endoscopic linear staplerを用いることで、安全に異常血管の処理を行うことが可能であり、有用であると思われた。

20 食道壁内転移を来した胃内分泌細胞癌の1例

島田 哲也・牧野 成人・渡辺 ゆかり
榎本 剛彦・須田 和敬・西村 淳
河内 保之・新国 恵也
厚生連長岡中央総合病院外科

症例は67歳男性、2ヶ月前から喉の食物つかえ感を主訴に当院内科受診し、上部消化管内視鏡で噴門部に3型の進行胃癌を認めた。下部食道には壁内転移を疑う粘膜下腫瘍様の病変を認めた。手術目的に当科紹介となった。左開胸開腹胃全摘、中下部食道切除、膈体尾部、脾合併切除を行った。術中行った腹腔内洗浄細胞診は陽性であった。病理組織診断は内分泌細胞癌で、広範なリンパ節転移と食道壁内転移を2箇所認めた。術後化学療法施行したが、術後6ヶ月で肝転移と腹膜再発による腸閉塞を来し、術後10ヶ月で永眠された。

食道壁内転移を来す胃癌は極めてまれである。術後早期に再発を認めた、食道壁内転移を伴う胃内分泌細胞癌の1例を経験した。文献的考察を加え、報告する。

21 食道癌術後の進行胃管癌症例に対して、化学療法後に胃管前庭部切除を行った1例

田中 雅人・矢島 和人・神田 達夫
番場 竹生*・中島 真人・松木 淳
小杉 伸一・西倉 健*・畠山 勝義
新潟大学大学院消化器・一般外科学分野(第一外科)
同 分子・診断病理学分野*

症例は58歳、女性。2000年9月に胸部中部食道癌に対して胸腔鏡補助下食道切除術、後縦隔経路胃管再建を施行されていた。術後スクリーニング目的の上部消化管内視鏡で再建胃管に低分化腺